

備前焼人間国宝

金重 陶陽（本名 勇）

昭和31年4月24日国指定重要無形文化財（保持者）

明治29(1896)年
～昭和42(1967)年

桃山備前を再現して備前焼を復興させ、備前焼中興の祖といわれています。茶陶を代表する作家で茶碗、水指、花入れに優品が多く、細工物にも長じて、名実ともに現代備前の第一人者です。

明治29(1896)年、備前焼窯元六姓の金重家の長男として生まれ、14歳で父棟陽について陶芸の道に入りました。棟陽は鳥や植物など細工物を得意とする焼き物師だったので、陶陽も花鳥や動物の制作からスタートしました。

陶陽の作品は備前では別格に扱われます。年をへるごとに評価が高まっていますが、これは彼の条理にかなった生活態度に根ざしていると思われれます。

陶陽と川喜多半泥子や北大路魯山人、荒川豊蔵、加藤唐九郎、三輪休雪、小山富士夫、イサムノグチなどの幅広い交遊によって芸域を広げました。茶を知らないで茶陶は作れないと、茶を習うことから始める、職人の玄人（芸徳一致）のところがありません。

昭和41(1966)年にはハワイ大学夏期大学に講

師として招聘され、翌42(1967)年4月、天皇・皇后が伊部にご来訪の折、大鉢をろくろで御前制作しました。つねに備前焼は土で決まるといい、使用する土は10年以上寝かせた完熟土でした。客を第一に考え、作品を値崩れさせないことが客を大切にすることにになるといふ人でもありました。

〔引用元〕

『わがまちの文化遺産』 記念誌編集委員会 編集
備前市文化協会 平成10年10月12日発行

藤原 啓（本名 敬二）

昭和45年4月25日国指定重要無形文化財（保持者）



明治32(1899)年～昭和58(1983)年

備前焼に文学的感性を盛り込み、啓備前と呼ばれる自由闊達な独自の作風を確立しましたが、84年の生涯は波乱に富み、40歳のころを境に暗と明に分されます。

大正7(1918)年賀川豊彦と知り合い社会問題に関心を持ちました。大正10(1921)年には早稲田大学英文科に聴講生として入学し、横光利一らとシェイクスピア文学を専攻。そのころ不二原敬二のペンネームで処女詩集『夕の哀しみ』を出版しました。大正12(1923)年、早大野球部監督の安部磯

雄の紹介で片山哲、河上丈太郎、水谷長三郎らと社会主義運動に身を投じたこともありましたが。その後一時、雑誌の随筆や地方新聞の小説を書きましたが、作家志望の夢が破れて帰郷しました。

昭和13(1938)年、郷土の万葉学者正宗敦夫の勧めで備前焼の世界に入りました。39歳のときでした。金重陶陽が完成された桃山備前を具現したのに対し、啓は単純、素朴、明快を作陶理念として、鎌倉期の豪放、粗野をねらい、とぼけた、面白い作品を多く世に出しました。

昭和20年代の初期作品は、荒い土味にねっとりとし、緋が発色した面白い造形が目立ちます。30年代は陶芸家として脂の乗ってきた時期で、焼成技術に秀で、窯変のみごとな花入れが多くあります。40～50年代は円熟期で、天衣無縫に生きた人間藤原啓の姿を表して、無作為の造形のなかに深い含蓄を秘めた独自の作風を確立しました。

生来酒を愛し、来客にも酒をすすめ意気投合すると作品を気前よく持ち帰らせました。生涯の後半は和服で通しました。

「私は土に救われた!」、啓の気持ちの全部でしょう。

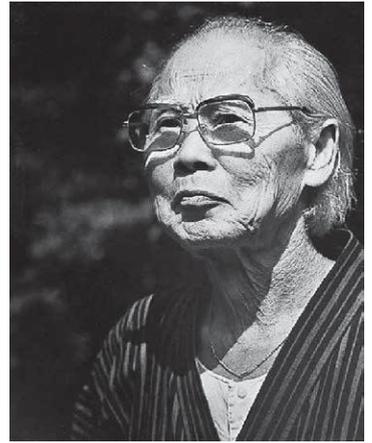
〔引用元〕

『わがまちの文化遺産』 記念誌編集委員会 編集
備前市文化協会 平成10年10月12日発行

山本 陶秀（本名 政雄）

昭和62年4月20日国指定重要無形文化財（保持者）

70年間焼き物一筋の人生を歩み、ろくろの名手といわれました。15歳のときから窯元修業に入り、27歳で独立したあと、ひととき京都の楠部弥一の門をたたきました。



明治39(1906)年～平成6(1994)年

昭和18(1943)年、軍需省の管轄だった国立京都窯業試験場が軍の依頼で、備前焼火礮を使用した食器を生産することになり、その制作者に選ばれました。また、備前焼の手榴弾も作りしましたが、実戦には使われませんでした。昭和44(1969)年には伊部をご訪問の三笠宮さまに、地元公民館で茶器・鉢など制作のろくろ技術を披露しました。

陶秀は昭和39(1964)年から昭和44(1969)年にかけて、つぎつぎとヨーロッパ5カ国(オランダ・フランス・イタリア・西ドイツ・イギリス)、韓国と東南アジア4カ国(台湾・香港・マレーシア・シンガポール)およびアメリカを歴訪しました。窯元、窯跡、史跡、美術館を視察して海外の文化に接し、芸域を広めました。

陶秀の作品のついて、陶陽の千利休、啓の古田織部に対し、小堀遠州にたとえる人がいます。遠州は江戸時代の作家であると同時に有名な大名茶人でもありました。陶秀の作品のキメが細かくてソツがなく上手ものの感のするところが、女性的といわれる遠州に似ているのでしょうか。

茶陶に長じ、茶入、花生に優れた作品が多くあります。陶秀は自然体を強調し、無理をせず、自然に逆らわないことを作陶の基本にしました。

〔引用元〕

『わがまちの文化遺産』 記念誌編集委員会 編集
備前市文化協会 平成10年10月12日発行

藤原 雄

平成8年5月10日国指定重要無形文化財(保持者)



昭和7(1932)年～平成13(2001)年

藤原啓の長男として現在の備前市穂浪に生まれました。出産時の事故により視力に障がいが残りました。文学を志し明治大学文学部へ進学、昭和30(1955)年卒業後出版社に勤めましたが、小山富士夫氏の勧めにより帰郷、父について作陶をはじめました。

豪放で力強く鷹揚とした作風を持ち味とされ、壺や鉢、花入れなどを手がける傍ら、東京、大阪、岡山、広島などにスケールの大きい創作レリーフやオブジェを制作。また、アメリカ、カナダ、メキシコ、オーストラリアの大学などで備前焼の講座を受け持ち、講演会や展覧会を行うなど備前焼の国際化にも努めました。父、啓氏とともに昭和期の備前焼隆盛を牽引、平成8(1996)年国指定重要無形文化財「備前焼」の保持者になりました。

〔引用元〕

『The 備前 Bizen 土と炎から生まれる造形美(FK)』

伊勢崎 淳(本名 惇)

平成16年9月2日国指定重要無形文化財(保持者)



昭和11(1936)年～

細工物をよくした備前焼の陶工伊勢崎陽山の2男として伊部に生まれました。昭和34(1959)年岡山大学教育学部特設美術科を卒業後、父について作陶をはじめました。昭和36(1961)年、兄、満とともに半地下式穴窯を築窯、初窯を出しました。以来、土や窯について研究や工夫を重ね、伝統的な茶陶から陶板やオブジェなどの造形作品まで幅広く手掛け、備前焼の新しい表現を求め展開してきました。世代を超えて様々なジャンルの美術にも関心が高く、国内外から多くの弟子を受け入れ指導に当たるとともに、日本工芸会常任理事、同中国支部参与などの要職を務めるなど、現代備前の要として活躍しています。

平成16(2004)年国指定重要無形文化財「備前焼」の保持者に認定されました。

〔引用元〕

『The 備前 Bizen 土と炎から生まれる造形美(FK)』